

## 出雲大社本殿遷座祭

錦織監督

映画の現場から



●○○● 49

5月10日。朝から降り続いてきた雨は午後になってやみ、夕方には足元が乾くほどに。私はその日、出雲大社にいた。本殿遷座祭。60年に1度の特別な日。ご縁をいただき、その瞬間にお参りさせていただくことができた。

映画を撮っていると、計算では到底撮ることができない奇跡的なワンカットが撮れることがある。そんなとき、スタッフは「映画の神様が舞い降りた」と口々に言う。「何としても良いものを」という思いで取り組み、「まさか」と思えるワンカットに出合えたときは「ああ、撮らせていただいているんだな」という気持ちになる。

スタジオで撮影し合成映像も使うと、野外撮影よりもコストがかかると思われがちだが、案外そうでもない。「太陽(照明)の角度はこうでああで」とこたわれば、野外での撮影は困難

## まさに神懸かり 力を実感

の連続だ。

今村昌平監督は「檜山節考」の撮影に3年かけた。

「初雪の雪の結晶の一つを撮影したい」というこたわりで、役者とスタッフが毎日スタンバイ。その瞬間を何日も待ったという話を主演した緒形拳さんから聞いた。初雪を撮るというこたわりに驚くが、自然相手の難しさは痛感している。

日本映画の大半はクランクイン前に「おほらい」を

する。私の監督作では、

「ミラクルバナナ」のときは出雲大社東京分祠で、おほらいしていた。 「錦織組」はできる限り、出雲の神に祈らせていたただく。

そのおかげでいつも天気には恵まれている。ただ晴れば良いわけではない。曇りのシーンは曇り空が、雨のシーンは雨を降らせるので晴れではなく、これも曇天がいい。「RAILWAY

YS」では、撮影スケジュール表を持った誰かが空の上にいるのでは、と思うほどドンピシャりの空模様が続いた。

そんな人知を超える力を、遷座祭の日の天候と神事に感じた。

神事は夜、厳かな雰囲気の中で始まった。大神様が無事に本殿にお戻りになり、国造とともに参列者が神語を三唱。身も心も引き締まる思い。巫女神樂、勅使拝礼、代表者拝礼の後、閉扉。国造がご神前にて一拝され、全ての行事が終わった。

それは、祭員が祭事終了を告げたときだった。ゴーツと風の音が山側から聞こえ、テントの中をサーツと風が吹き抜けていく。その瞬間、サーツとバケツをひっくり返したかのような雨が、暮き替えたばかりの本殿の大屋根に降り注いだ。まさに神懸かり。居合わせたほとんどの人がそこに「神」を感じたのではないだろうか。

雨降って地固まる。60年に1度の巡り合わせのご縁に、心から感謝している。

第4金曜に掲載



本殿遷座祭で、ご神体をおさめたみこしを担ぎ、本殿に向かう神職  
=10日、出雲市大社町杵築東の出雲大社